

論文内容の要旨

報告番号	空欄	氏名	浅井 英樹
Quality of dispatch-assisted cardiopulmonary resuscitation by lay rescuers following a standard protocol in Japan: an observational simulation study (和訳) 日本の標準プロトコールに従った口頭指導下での非医療従事者の心肺蘇生法の質の評価:シミュレーション観察研究			

論文内容の要旨

病院外における突然の心肺停止は先進国においても主要な死因であり、迅速かつ有効な心肺蘇生(CPR)を行うことが、救命には不可欠である。一般に病院外で心肺停止を目撃するのは非医療従事者が多く、かれらは、日常的にCPRを経験することがないため、CPR自体ができない、またできたとしても有効なCPRではないことが多い。そのため、119番通報時に、通報を受けた司令員が口頭で胸骨圧迫の指導を行うが、それによりCPRを行う率が上がることは知られている。しかし、実際の現場で、救急隊に引き継ぐまでのCPRの質を評価するのは現実的には困難であり、これまでもその質の検討はほとんど行われていない。本研究は、シミュレーション人形を用いて、非医療従事者に口頭指導下でCPRを行ってもらい、その質を評価し、今後の口頭指導の在り方に新たな知見をもたらすことを目的とした。橿原市内の大型ショッピングモールで非医療従事者23人(BLS受講群13人、未受講群10人)に趣旨を説明し、口頭指導下での胸骨圧迫シミュレーションを行ってもらった。司令員は総務省の標準プロトコールに従ってCPRの指導を行った。本研究で得られた結果として胸骨圧迫の速さと深さの中央値は、それぞれ106回/分、33mmであった。119番通報から胸骨圧迫開始までは119秒であった。これらに関しては、BLS受講群、未受講群の2群に差を認めなかった。一方、正しい位置での胸骨圧迫は、BLS受講群で有意に多かった(84.6% vs 40.0% $P=0.026$)。また、12人の被験者(52.2%; BLS受講群7人、未受講群5人)は、司令員が患者の様子を尋ねると、胸骨圧迫を中断(3~18秒)した(2群間の有意差なし)。非医療従事者の口頭指導下のCPRでは、過去のBLS受講に関係なく、胸骨圧迫の深さは最適とされる50~60mmに到達していないことが分かった。一方、胸骨圧迫の位置は、BLS受講群では、適切な位置で行っていたが、未受講群では半数以上が正しい位置で行えなかった。司令員の「胸の真ん中を圧迫してください」という指導では、尾側側(場合により胃の上あたり)を圧迫するが多かった。また、口頭指導中に患者の状態を訪ねてしまうと呼吸循環の確認のために胸骨圧迫を中断することが分かった。本研究は、今後の口頭指導の在り方に関してさらに改善の余地があることを示したものである。